

文科省の金子補佐が宇宙開発の現状報告を行った後、野口宇宙飛行士がソユーズを操縦中に事故が発生した場合の日本の国としての賠償責任についての説明があった。併せて3分程要した。更に、松尾委員長から6分弱の退任の挨拶があり、続けて池上委員の「送る言葉」を含め6分弱の発言があった。

事務局: 前回 12 月の最後の委員会で、青江先生から野口飛行士のソユーズの打上げに関しまして、条約上の位置付け・整理につきましてご質問御座いまして、事務局の中で整理を致しましたので、簡単にご報告申し上げたいと思っております。

事務局: 昨年末に頂いた宿題について、改めて回答致します。先ず、ソユーズの打上げに関する損害の責任関係ですが、宇宙物体により引き起こされる損害についての国際責任に関する条約と云うものがありまして、宇宙物体が地表に於いて引き起こした損害については、打上げ国が無過失責任を負うと云う風に規定されております。で、今回の打上げ国は、其の条約の定義に基づきますと、ロシアとカザフスタンが先ず打上げ国と云う事になります¹。で、地表で起きた損害に関しての責任関係と云うのは、打上げ国が負うと云う事で、今回野口飛行士はソユーズに搭乗しているものの、

¹ 此の認識で構わないのかという点に掛っていると思う。他国の組織の打上げサービスを利用して衛星を打上げる場合、衛星を作って打上げを委託した組織の所属国も「打上げ国」になるのではないか。

打上げ国と云う中には日本は入って来ないと云う事で、宇宙損害責任条約上の打上げ国には、まあ、日本は該当しないと云う事で、日本国は直接の責任を負うと云う事は無いと考えます。

またあの、今回のソユーズの打上げと云うのは、国際宇宙ステーションの実施に係るものと云う事で、此れに関しましては「民生用国際宇宙基地の為の協力に関する協定」と云うものが御座いまして、其の中では宇宙ステーション計画に参加してます各国は、相互に責任を放棄すると云う、クロスウェーブ²と云うものが規定されておまして、日本の飛行士が引き起こした損害と云うものに対して、ロシアが日本に対して責任、損害賠償を請求すると云う事は、協定上出来ないと云う事になって居ります。

従って、今回仮に、まあ野口飛行士が操縦して損害を引き起こしたと言っても、其れは先ずロシアが打上げ国として責任を負うと云う事になると云う風に考えます。

松尾委員長: どうも有り難う御座いました。

私、本日を持って退官致しますので、一言ご挨拶。

まあ、委員時代を含めると6年9カ月の長きに亘って在職した事になります。早々にぶつかりましたのが、H- A6号機の失敗と云うので御座いまして、誰かが「宇宙はワン・ストライク・アウトの世界だ。」と言いましたけど、誠に其の通

² 此れは「宇宙ステーション計画」を通じて生じた自国の損害を、相互に賠償請求しないと云う協定だろう。第三国から出される損害賠償請求に対しては、何等拘束していないと思われる。

りであります。まあ、これは一寸したミスが命取りになると云う意味と、幾ら成功を積み重ねても一度失敗すると大変厳しい批判に晒されると、二つ意味があると思いますが、全くその通りの世界だと思えます。NASA のゴルディン長官だったと思えますが、「宇宙には何時の間にか、評価する奴の方が手を下す奴より多くなってしまった。」って云う、これは火星が立て続けに失敗した時に言った言葉ですけど、分かる様な気が致します。でまあ、ロケットは其の背景に引っ込んで、毎回打上げの成功が話題になる様ではいけないと私は考えて居りましたが、一旦落ちてみますと此のロケットがインフラ中のインフラである云う事が身に沁(し)みる訳で御座います。で、あの、まあ、「みどり-」の失敗なども当時ありましてですネ、まあ、再建のお手伝いをしました。衛星共々、ロケットの打上げは此の処順調に推移して居りますけども、其の陰には JAXA 並びにインダストリーの方々の大変地道な努力が、積み重ねがある訳で、其の体系を風化させる事無く、維持して行く事が大事だと云う風に思っています。

結果としてはロケットがサンプルとしてある訳ですけど、其の開発能力も誇るべきものでありますし、自負すべきものであると思っております。将来にもそう云った努力を怠らないようにしなければならぬと思えます。

月は、長期計画ですかネ、矢張り。これは法律上は此の委員会と JAXA との最大の接点で御座います。で、まあ、青江部会長の下、大いに力を注いだと。其の中で一つ挙げ

るとすれば探査ではないでしょうか。まあ、色んな事書かれてる訳ですけども。当面は科学中心である云う事は、これはまあ否めないと思えますけれども、あの、**人類の活動域の拡大とか、それからまあ、国としての総合力のアピールと云った視点も加え³**まして、探査と云うカテゴリを此の長計では設けました。で、私自身は、宇宙活動を最も宇宙活動たらしめて居るのは探査であると思っておりますが、宇宙開発委員会に私が来た頃、其れを言いますと「今時そう云うのは流行らない。」と云う事で、ただ、「はやぶさ」の活躍があって、其の内ブッシュ・ビジョンも出て、世の中は変わるものだと云う風に思っております。オーガスティン委員会の誰かの発言に、「テフロン引きの鍋を作るのであれば、宇宙開発意外にも色んな方法がある。」と云うのが御座います。だからどう斯う云う気はありませんけども。で、月につきましてはですネ、あの、これも長計の中から引用致しますと、**「月探査が国際的な側面を有する活動である事を踏まえ、**

³ ゴダード、オーベルト、ツィオルコフスキーが宇宙に向けた活動を開始した時、「自らが宇宙を旅する」事を動機に、多くの協力者を集めた。此れに勝る動機は他に何も無く、宇宙探査を否定する事、有人宇宙探査を否定する事は政治的に大きな誤りだと思う。但し、此の活動には巨額に資金が必要であり、世界を相手に「牽引」して行くのも間違いだと思う。従って、有人宇宙探査を否定せず、且つ過度に積極的にならない事ではないだろうか。何処かの一国だけが宇宙探査の技術力を占有する様な事は避けなければならない。

我が国固有の理由に因るほか、国際的な動向に即し、総合的な観点から適宜適切に見直す事が必要である。」⁴と云う風に此処ではして居ります。当に此処で用心しようとしている様な事が、今起ころうとしている訳で御座います、今後の柔軟且つ真摯な検討を期待している処で御座います。

で、有人につきましては余り踏み込みませんでした。有人の意義から議論を深めて行く様な時になってるんじゃないかと思って居ります。ただ、恐らく其の結果はですネ、有人である事には意味があると云う事になってしまうのではなからうかと云う風に思います。で、若しそうなればですネ、有人を模擬しても其の代替物にはならないと云うのが結論になります。

私のまあ、感覚としてはですネエ、有人をやらずして何の宇宙開発ぞと言う人が居る事は理解出来ます。...と云うのが私の見解であります。

青江: 其れだけ言うと誤解があるかも知れない。

松尾委員長: ハッハッハ。

青江: もっと、もう一言其れに加えないと。

松尾委員長: まあその、火星に着陸したスピリット、オポチュニティですネ、此れのエアバッグが開いて、中からローバが出て、

⁴ 公的な文書である「長期的計画」では此の様な言葉しか使えないと思うが、「総合的な観点から適宜適切に見直す。」の意味は、「一国の独走を許してはならない。」と同義だと考えている。コーカシアンなら口にする事が出来るが、孔子の教えを学んだ者には口にする事が憚られる表現だと思う。

で、其れを見てた地上の管制室が沸き返る訳ですネ。此れをフィルムで見せられましたけど、大変感動的でした。此れはさっきの私のコメントに対する補足部分です。

それから、宇宙基本法は制定されましたけど、まあ、実行体制については道半ばで御座います。長らく宇宙開発の現場に身を置いて来た者として、此の事が別に悪い事だと思いませんが、気掛かりです。あの、此の事が悪い事だと思っていないのは、念の為申しますと、道半ばな事ではなくて、宇宙開発に長らく身を置いて来たと云う事であります。

ま、しかしあの、何れにしるですネ、JAXA に確りして頂かなければならいと云う事は確かです。ただ、もう一つ付け加えますと、間違った列車に乗ったら、其の列車がどんなに早く走っても意味が無いと云うのもありますから、ご紹介しておきます。

皆様のご助力を以ちまして大過無く、大過無くなんて事はいけないのかも知れませんが、終わらせて頂きました。あの、傍聴の方々には発現なさいたいと云う衝動を抑えるのに苦労なされたかも知れませんが、まあ、此処での議論が今後でのご支援に繋がれば幸いです。長い間有難う御座いました。

まあ、色々引用致しました。私も昔洒落た事を言わなかった訳じゃないんですけど、一寸此処でご披露するには、品が無いので控えさせていただきます。

どうも長い間有難う御座いました。本日此れで。...(傍

聴者席からも盛大な拍手。)

池上: 宇宙開発委員を代表⁵致しまして、一言お礼を申し上げたいと思います。委員長に於かれまして、平成 15 年 4 月に宇宙開発委員に着任されまして、其の後委員長代理、或いは調査部会長、安全部会長等を歴任されまして、平成 19 年の 1 月に委員長にご就任されました。で、今お話御座いました様に、平成 15 年 11 月に H- A の 6 号機が打上げ失敗と云う事で、多分非常にご苦労されたと云う風に思うんですが、でも、過去のお話を聞くと、どうも失敗のベテランらしくて、40 年前に秋田で大失敗をやったって云う様なお話が御座いましてですネ、で、まあ、そう云う事があったかどうかは別と致しまして、其の原因究明と再発防止については非常にあの、大きな成果を上げられたと。で、其の結果これまで 11 回ですか、しかも H- B を含め 11 回の打上げに成功して来ております。

で、あの、私、今、調査部会長、其れから安全部会長なんですが、何時も矢張り打上げの前には心配で、16 年 6 月の此の事故のレポートが御座いますネ、あれを何時も眺めて居るんですが、最近気付いたんですが、あの中ですネ、その、日本に於ける宇宙開発の無責任体制が指摘されると。で、あの、プライム制を導入したらどうかと云う様な話書かれて居りまして、で、今思いますと、非常に大きな日本の宇宙開発についてのですネ、飛躍がプライム制と云う

処から発生致しまして、出て来たんじゃないかと云う風に思って居ります。

で、もう一つは 3 機関の統合について、色々ご苦労されたと云う事を伺って居りまして、で、これは多分あの、宇宙科学の視点からあの、... どちらかって云うとハウスキーピング的な事をやっていた NASDA と一緒になるって事がどうかって云う様な事、色々ご苦労されたって云う風に思うんですが、まあ、何れにしても其の後あの、「はやぶさ」「ひので」或は「かぐや」が大成功して居りましてですネ、少なくとも今見る限りにおいては 3 機関統合って云うのは大きな成果を上げて来たんじゃないかと。たまたま色々片付けてましたら、1996 年の新聞が出て来ましてですネ、で、其れに依りますとエエ、あの、宇宙研の方で 2002 年を目途に無人探査機を下ろす事を含めた月の計画が書かれて居りましてですネ、で、此れも恐らくあの、3 機関統合の後、当時の NASDA と色々議論した結果が今回の「かぐや」の成功に繋がってるんじゃないかと云う風に思ってます。で、あの、宇宙科学って云うのは矢張り、宇宙開発をやる上で非常に重要でありましてですネ、で、其の宇宙科学とそれから実際の、其れを実現する為の技術についてですネ、非常にこう、あの、何て言うんですか、上手に育てて来て居るんじゃないかと云う風に、私、横から見て感じて居りました。そのあの、まあ、謂わばリーダーシップとバランス感覚と云う風に言うのか、或いはあの、非常にスマートなマネジメントって云う風にタマデク(?) かも知れませんが、あの、

⁵ 宇宙開発委員長になる事を意味しているが、公表は無かった。

我々委員は非常に安心感を以て今までやらして頂いた事を心から感謝したいと思います。

で、一寸個人的にお話しますと、私もそうだったんですが、委員長も一つのテーマを、学生時代からですネ、ズーッと一生やって来れたんじゃないかと云う風に思います。で、ご案内の通り、その、ご案内って云うか、その、ペンシル・ロケットから始まりまして、それから最後はミュー・ファイブまで仕上げる事が出来たと、此れはもう技術者として、或いは研究者として、こんな幸せな事はないんじゃないかと思っ
て居りまして、で、特にミュー・ファイブについては大学のフチ(?)研究所が今迄作って来た者の中では一番大きな成果ではないかと云う風に、私はあのー、思っ
て居ります。ただ、私が出来なかった事は、実は委員長あのローマ法王に謁見されてると。で、多分、其の成果が祝福されたのか、一寸良く分かりませんが、こればかりはですネ、私どう頑張っても出来ないナって云う事で、其れも非常に素晴らしい、あの、経験をされたんじゃないかと云う風に思っ
て居ります。

で、もう一つはあの、私何時も斯う云うお話し
て思うんですが、研究所長を経験されてると。実は研究所長って云うのはアレですよネ、自分ではやりたい研究出来なくてですネ、如何にその、部下が成果を出してくれるか⁶って云う事

⁶ どうも、「評価」を重視している様に感じられる。評価の対象となる事象と関係が深そうな、又は単に関係がありそうな事象を見付けると、其れで「分析」が出来たと思っ
ていらっしゃりはしないか。

を、或る意味じゃ、あの、忍耐と寛容で以てやらなきゃいけないと云う、非常につらい立場である訳なんです
が、私矢張り其の経験が今回の宇宙開発委員長としてもですネ、現場を思い遣りながらやってくと云うやり方、つまり
実際成果を産むのは現場ですヨと云う認識に立っ
てですネ、マネジメントをやって来られたんじゃないかと云う風に思っ
て居ります。

エエ、あの、何れに致しましてもあの、健康にご留意なされまして、で、今後もですネ、宇宙コミュニティに是非貢献を
続けて頂きたいと云う事を申し上げまして、私のお礼の言葉にしたいと思っ
ています。どうもホントに有難う御座いま
した。

松尾委員長: どうも有り難う御座いました。あの、立派な委員の方に恵まれまして、忍耐も寛容も、余り必要ではなかつ
たと申し上げておきます。どうも、本日は此れで閉会と致します。どうも有り難う御座います。

商品化を目指す研究では時間短縮に有効な手法かも知れないが、未知の世界に踏み込もうと云う研究開発では、先ず十分な「調査」を行い、様々な「分析」を試み、其の後で「評価」をして「決断」を行うのが正攻法だろう。不十分は「調査」で「評価」を急ぐ事で、「拙速」を重ねる事から、宇宙の業界が好ましからざる状況に陥らない事を切望する。